第4回研究発表会要旨

(1996年9月21日，早稲田大学文学部第一会議室)

生成文法のPRO（制御構文での仮想主語）について

甲斐崎　由　典

チョムスキーの生成文法では，不定詞句を目的語に取る文等のいわゆる制御構文を分析する場合，その不定詞句の意味上の主語も，句構造上ではれっきとして存在する文肢PROとして扱い，そしてPROが照応する先行詞を特定する理論を制御理論と呼んでいる。この仮想主語PROについては，生成文法理論内の他の部分との整合性から，いくつかの特性がチョムスキーによって定義されているが，様々な個別言語での分析を行っていった場合の問題点も指摘されている。本研究では，このPROの定義の内，PROは代名詞類性と照応形性というふたつの素性を同時に満たす，という定義の問題点を取り上げ，最近の研究も参照しながら新たな提案を行った。

チョムスキー自身によれば，上記の定義により，束縛原理のA項とB項のふたつも同時に満たされなければならないため，PROはいつでも統率されないこと，そしてそこからさらに格を付与されないことが帰結されるとしているが，不定詞句の意味上の主語としてのPROには動作主などのθ役割が割り当てられているので，この矛盾を解決するために可視性条件に特別の規定が必要になる。また，アイスランド語等の制御構文の分析からはPROが性・数・格の情報を保持していることが指摘されている。

これに対し，PROに専ら照応形性の素性しか想定しない場合は，照応についてはわざわざPROのためだけの独立の制御理論が必要なくなる他，θ役割の付与についても可視性条件に特記事項は必要なくなる，などの長所があるが，恣意的PROの分析では，PROの照応の先行詞としてもうひとつ仮想のproを想定しなければならないことや，PROが絶えず先行詞に構成素統御されていなければならない，という規定をどのようにかわすかが問題となる。

また，PROに専ら代名詞類性の素性しか想定しない場合は，直前の仮定と同じく，独立の制御理論が必要なくなる他，照応形のように先行詞に必ず構成素統御されている必要はなくなるという長所があるが，proとは別の，格支配は受けない代名詞類と規定すると，今度は再び可視性条件とθ役割の付与に関して問題が生じる。

そこで筆者は，PROに代名詞類性という素性のみを想定する考え方をさらに進めて，PROをproの一種と考えることを提案したが，その場合，直前の仮定の場合に挙げた2点の長所の他に，proは音形を持たないこと以外は普通の代名詞と同等のものなので，性・数・格の情報を保持でき，そこから格を付与されている文肢としてθ役割も可視性条件に従って振り分けられることが説明できることになる。ただし，この考え方を採る場合，制御理論が必要なくなる代わりに，代名詞類であるPROが何を指示しているかを明確にするために，PROに限ったことではないが，代名詞類の意味解釈の理論を一層整備する必要があろう。